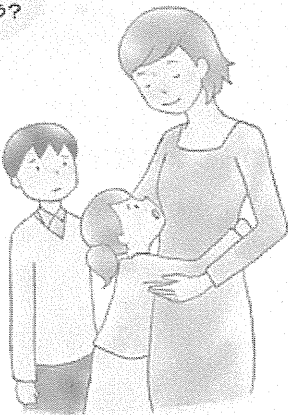


子どもたちは こんなことを考えています

お父さん/お母さんは、
どんな病気なの？

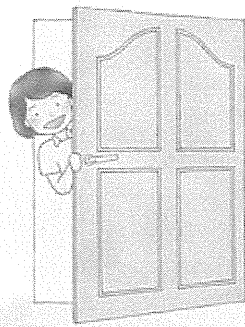
ぼく/わたしが
悪い子だから
病気になったの？

これから
どうなるんだろう？



子どもたちは、病気について何も知らされて
いなくても、いつもと違う何かが起こっている
ことを敏感に感じ取ります。

もしかしたら、ひとりではいろいろと考え事を
しているかもしれません。



がん患者さんの お子さんに関する 支援のご案内

お子さんに関するご相談をお受けいたします。

ご希望がございましたら、
主治医または看護師へお伝えください。
または下記予約センターへお電話ください。
面談の予約を取ることができます。
お気軽にご連絡ください。

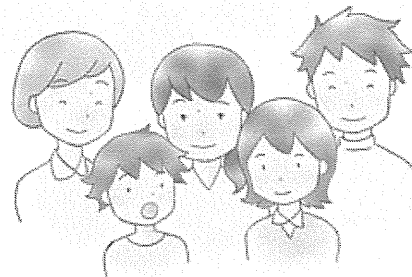
院外または初回のご相談は

092-542-8532

2回目以降のご予約は

予約センター **092-541-3262**

【担当】サイコオンコロジー科
心理療法士 / 白石 恵子
医師 / 大島 彰
緩和治療科
医師 / 大谷 弘行



独立行政法人 国立病院機構
九州がんセンター
緩和ケアチーム
〒811-1395 福岡市南区野多目3丁目1-1
TEL 092-541-3231(代) FAX 092-551-4585
URL <http://www.la-nkcc.jp/>

子どもたちに 病気についてどう伝えるか 話し合しましょう

子どもたちに伝える時は…

1. 今の状態を説明する

子どもたちは学校へ行ったり、遊んでいたとしても、
心のどこかで必ずお父さん/お母さんのことを心配
しています。
お子さんにわかる言葉で、今何が起こっているのかを
説明してください。

2. 病気は誰のせいでもないことを伝える

お父さん/お母さんの病気は誰のせいでもないことを、
お子さんにはっきりと言葉で伝えてください。

3. がんはうつらないことを教える

子どもたちは、病気について知り始めると、次に
“ぼく/わたしも同じようになるのかな?” “近寄っても
大丈夫?” と心配します。
“がん。は風邪のようにうつらないことを
教えてください。

子どもたちへうまく話すことが
できるのかな?
伝えた後、子どもたちの反応が心配。
どうなるの?

治療中は、ご自身の気持ちの浮き沈みや体調の
変化も大きく、なかなか思うようにお子さんに
お話しできない事があるかもしれません。

私たちは
患者さん、そして
子どもたちを
サポートします

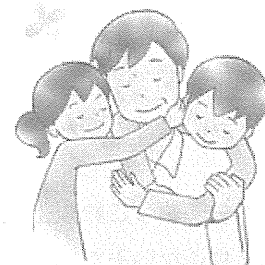
患者さんへのサポート

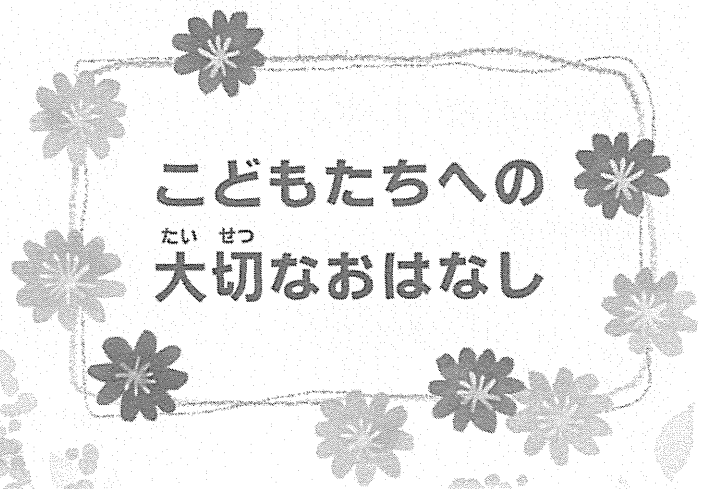
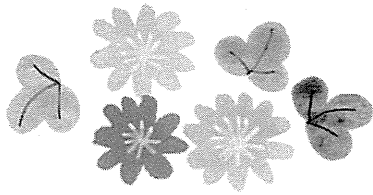
患者さん、またはご家族から、お子さん
に関する疑問や気がかり、不安なことなどを
お聞きします。一緒にお子さんの対応に
ついて考えていきます。

子どもたちへのサポート

私たちが直接、お子さんと話をしたり、
遊んだりしながら、お子さんの気持ちに
寄り添います。
お子さんがお父さん/お母さんの病気を
理解し、受け止めるためのお手伝いを
していきます。

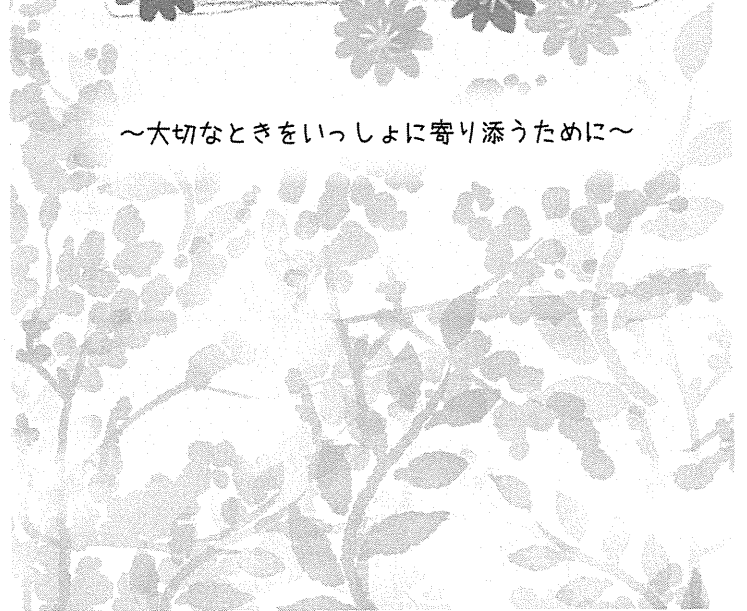
子どもには、大人が思っている以上に理解力や適応力があります。
子どもたちの不安を和らげ、それぞれのご家族らしく生活が出来るようにご支援いたします。





こどもたちへの たい せつ 大切なおはなし

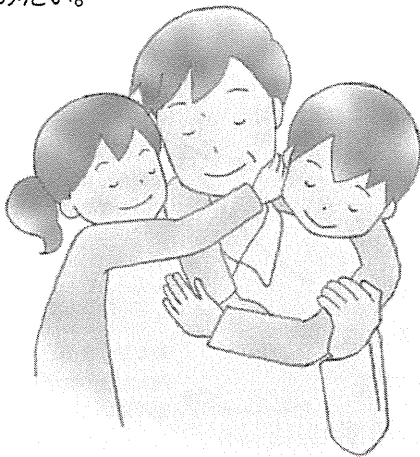
～大切なときをいっしょに寄り添うために～



独立行政法人 国立病院機構 緩和ケアチーム
九州がんセンター
〒811-1395 福岡市南区野多目3丁目1-1
TEL 092-541-3231(代) FAX 092-551-4585
URL <http://www.ia-nkcc.jp>
【冊子制作】サイコオンコロジー科

みんなで
ほんとう
本当によく がんばってきたね。

でも、もうこれ以上
いじょう
なならないみたい。



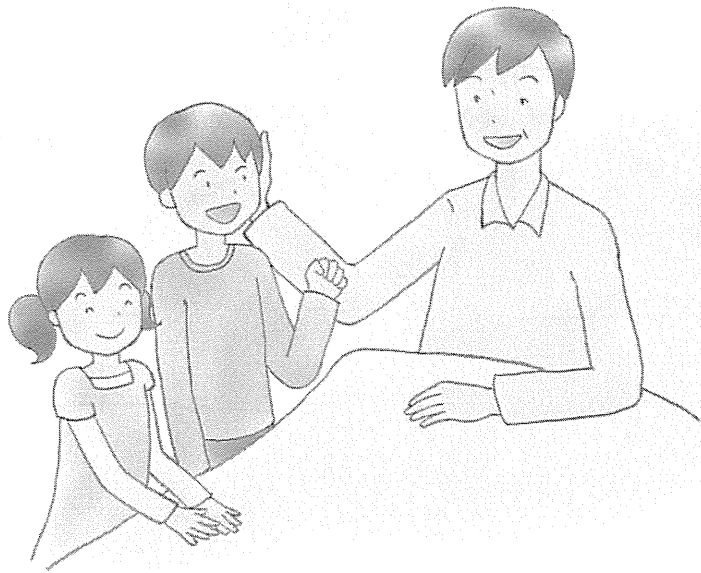
おとうさんが
くすり
つらいときのお薬はあるから
しんばい
心配いらないよ。

おとうさんのびょうき、
しんばい
心配だね。

おとうさんは、
がんというびょうきなんだ。

うつることはないから
あんしん
安心してね。

いま
今まで、いっぱい いっぱい
びょうきをやっつけようと
がんばってきたんだよ。

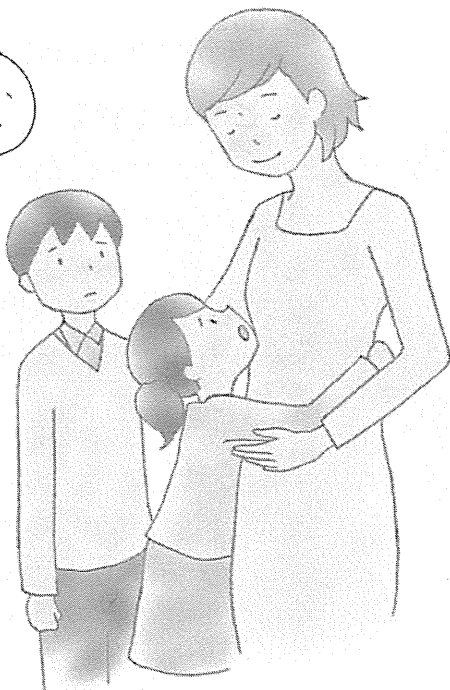


あなたも
よくがんばってきたね。

おとうさんのびょうきは
あなたのせいじゃないし、
だれのせいでもないんだよ。

なに こま
何か困ったことがあったら
いつでも そばにいるかんごし看護師さんや
まわりのおとなに き聞いてね。

ねえねえ、
あのね…



おとうさんは
あなたが
だいす
大好きだよ。



うちの子どもたちね、

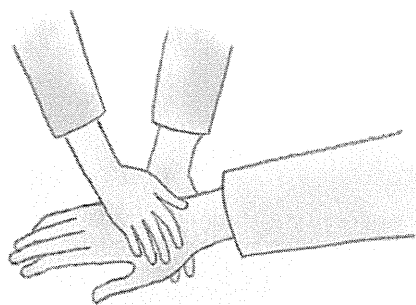
あなたは おとうさんと
いっしょにいてもいいし
つらいときは
別のことをしていてもいいんだよ。

おとうさんが
あなたのことを とてもほめていたよ。
じまんの子^こなんだって。
あなたのことを話^{はな}すときの おとうさんは
いつもとても楽し^{たの}しそう。



さみしくなったら、会^あいにきてね。

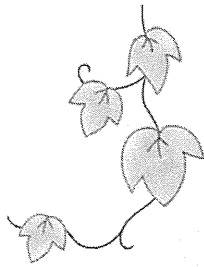
手をにぎってあげると
おとうさんも安心^{あんしん}して
うれしいよ。



ありがとう

はなし
お話^{はなし}ができないの、
どうしてかな？

おとうさんは今、
がんばってきた体が弱って
お話ができないの。

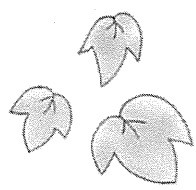


でもあなたの声は、聞こえているし、
あなたがそばにいることは
目をとじていても
分かっているよ。

来てくれたんだね…
そばに来て大丈夫だよ。

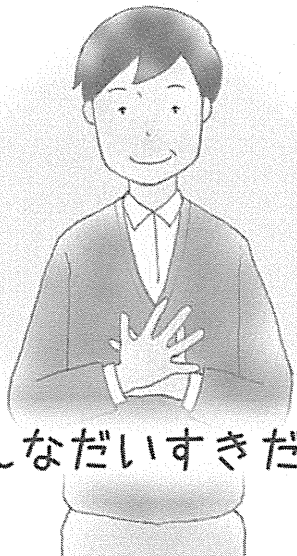


うとうとねむっているから
苦しくないよ。



だんだん息をする力が弱くなってくるけど
つらくはないよ。

今は声も聞こえるし、
あなたがそばにいることも わかっている。
だから話したいことがあったら
言ってね。



みんなだいすきだよ…

これからとても
大事なことを
お話するね。

ひと
人はみんな、いつかは死んでしまう。

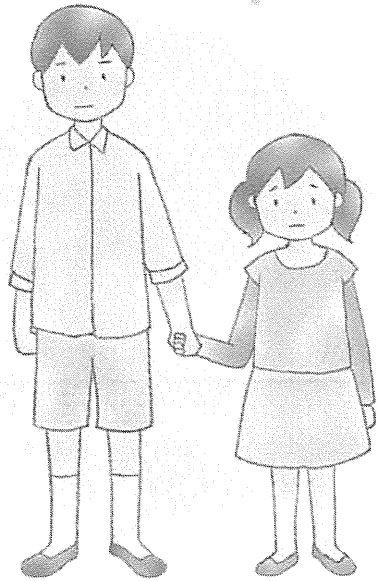
それは分かるかな？

かな
悲しかったり、こわかったり、
しんばい
心配になるよね。

おとうさんは少しずつ

みんなとのさいごのお別れが
わか
ちか
近づいているんだ。

さみしくなるね。



かんが
いろいろ考えたり

こころ お っ
心が落ち着かなくなるのはみんな同じだよ。

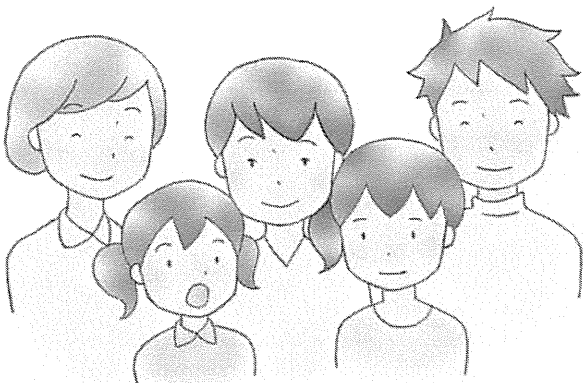
ゆう き
すこし勇気があるかもしれないけど

ひとり
一人で考え込まずに

ひと はな
まわりの人に話してみよう。

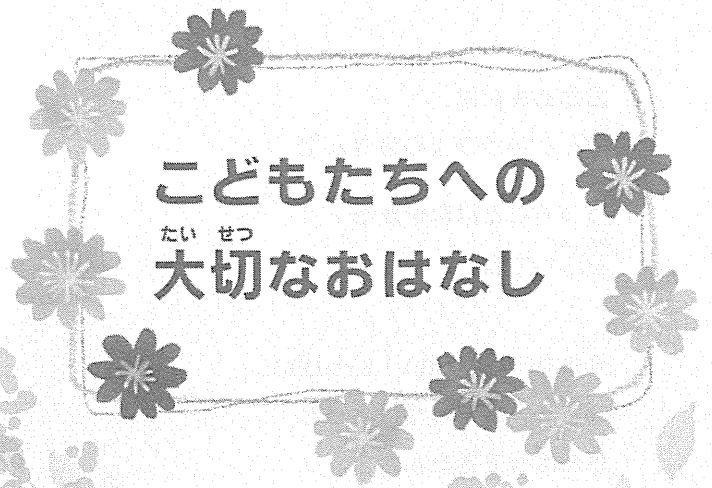
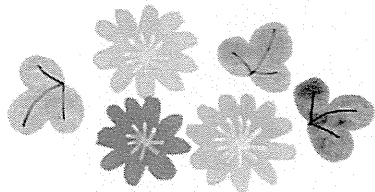
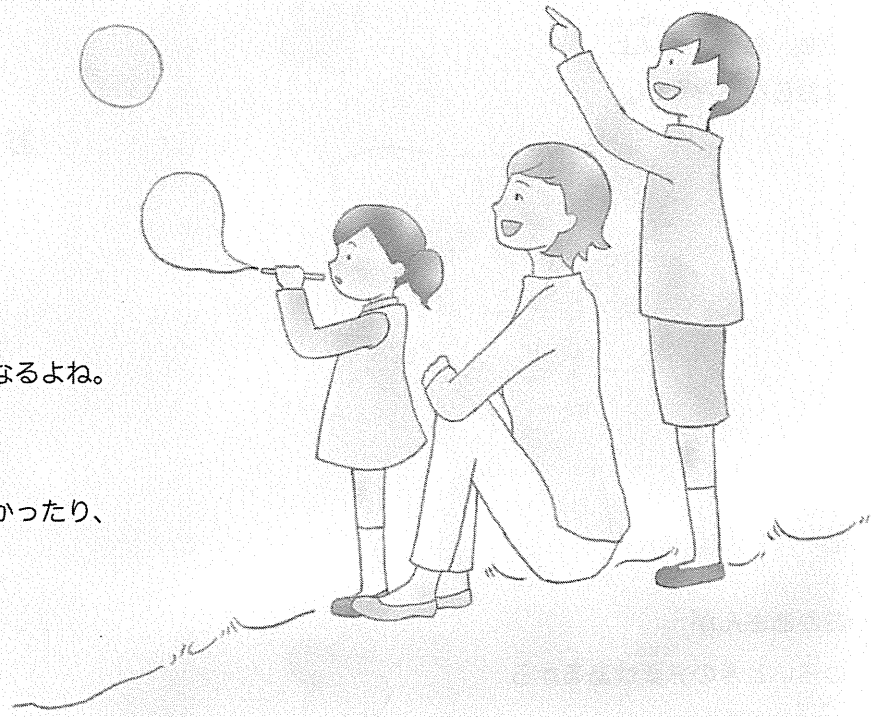
これからどうしたら

いいのかな？



これからどうやって
す 過ごすといけないのか不安になるよね。

なん 何にもしたくなくなったり、
かな おとうさんがいないことが悲しかったり、
ゆる 許せなかったりもするかな？



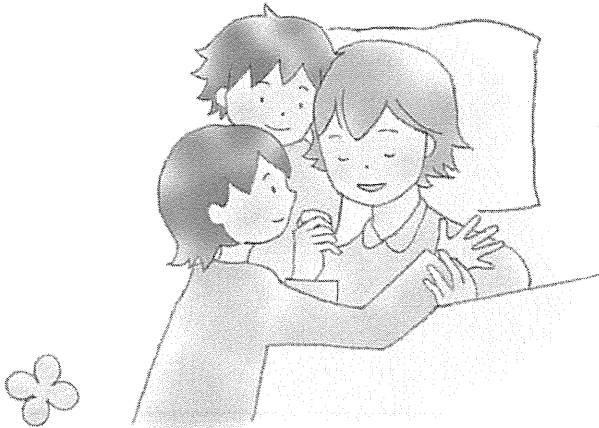
～大切なときをいっしょに寄り添うために～



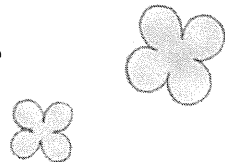
独立行政法人 国立病院機構 緩和ケアチーム
九州がんセンター
〒811-1395 福岡市南区野多目3丁目1-1
TEL 092-541-3231(代) FAX 092-551-4585
URL <http://www.ia-nkcc.jp>
[冊子制作] サイコオンコロジー科

みんなで
ほんとう
本当によく がんばってきたね。

でも、もうこれ以上
いじょう
なおらないみたい。



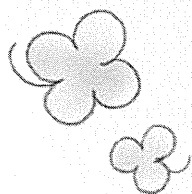
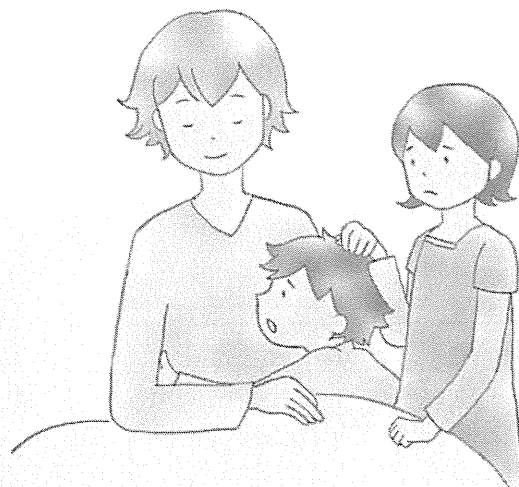
おかあさんが
くすり
つらいときのお薬はあるから
しんばい
心配いらないよ。



おかあさんは、
がんというびょうきなんだ。

うつることはないから
あんしん
安心してね。

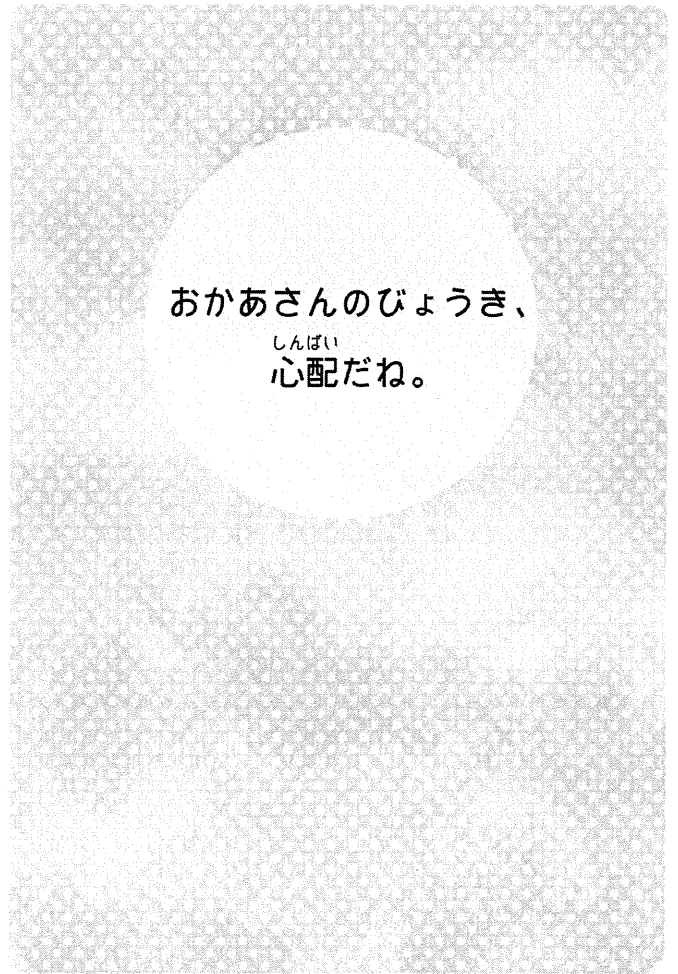
いま
今まで、いっぱい いっぱい
びょうきをやっつけようと
がんばってきたんだよ。



あなたも
よくがんばってきたね。



おかあさんのびょうきは
あなたのせいじゃないし、
だれのせいでもないんだよ。



なに ^{こま}
何か困ったことがあったら
いつでも そばにいる看護^{かんごし}師さんや
まわりのおとなに ^き聞いてね。



おかあさんは
あなたが
^{だいす}
大好きだよ。



おかあさんが
あなたのことを とてもほめていたよ。
じまんの^こ子なんだって。
あなたのことを話^{はな}すときの おかあさんは
いつもとても楽し^{たの}そう。

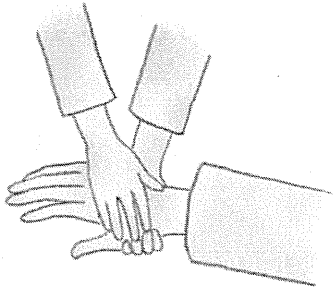
あなたは おかあさんと
いっしょにいてもいいし
つらいときは
^{べつ}別のことをしていてもいいんだよ。



さみしくなったら、^あ会いにきてね。



て
手をにぎってあげると
おかあさんも安心して
うれしいよ。



ありがとう

はなし
お話ができないの、
どうしてかな？

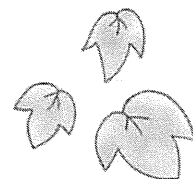
おかあさんは今、
がんばってきた体が弱って
お話ができないの。

でもあなたの声は、聞こえているし、
あなたがそばにいることは
目をとじていても
分かっているよ。

来てくれたのね…
そばに来て大丈夫よ。



うとうとねむっているから
苦しくないよ。



だんだん^{いぎ}息をする力が弱^{ちから}くなって^{よわ}くるけど
つらくはないよ。

いま^{いま}こえ^{こえ}き^き
今は声も聞こえるし、
あなたがそばにいることも わかっている。
だから話^{はな}したいことがあったら
い^い言^いってね。



みんなだいすきだよ…

これからとても

だいじ^{だいじ}
大事なことを

はなし^{はなし}
お話するね。

ひと^{ひと}
人はみんな、いつかは死^しんでしまう。

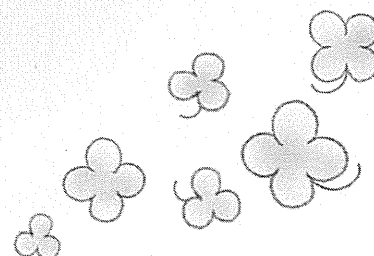
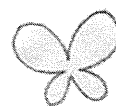
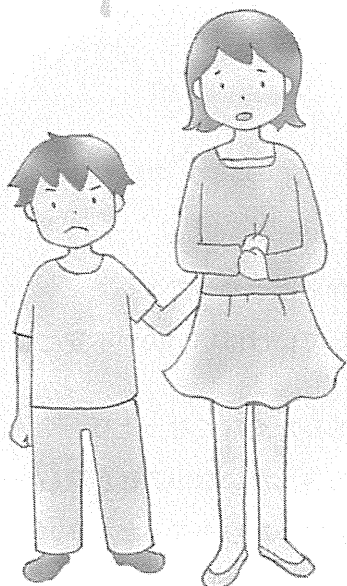
それはわ^わかるかな？

かな^{かな}
悲しかったり、こわかったり、
しんばい^{しんばい}
心配になるよね。

おかあさんはすこ^{すこ}しずつ

みんなとのさいごのお別れが
わか^{わか}
ちか^{ちか}
近づいているんだ。

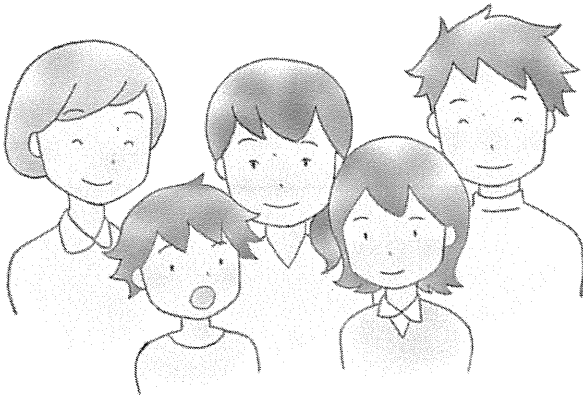
さみしくなるね。



いろいろ^{かんが}考えたり
こころ^おお^つ心が落ち着かなくなるのはみんな同じだよ。

すこし^{ゆう}勇^き気がいるかもしれないけど
ひとり^{ひと}一人で考え込まずに
まわり^{ひと}の人に話^{はな}してみよう。

これからどうしたら
いいのかな？



これからどうやって
す^ず過ごしていけばいいのか不安になるよね。

なん^{なん}何にもしたくなくなったり、
お^おかあさんがいないことが悲^{かな}しかったり、
ゆる^{ゆる}許せなかつたりもするかな？

厚生労働科学研究費補助金がん臨床研究事業「がん診療におけるチャイルドサポート」

平成 23～25 年度 総合研究報告書

癌患者の子どもへのチャイルドサポート介入調査

研究分担者 清藤佐知子 国立病院機構四国がんセンター 乳腺外科 医師

研究協力者 井上 実穂 国立病院機構四国がんセンター 臨床心理士

研究要旨

我々は、がん患者の子どもへのサポートの拡充のため、**I. がん医療およびチャイルドサポートを提供する医療者の支援、II. 患者（親）および子どもを含めた家族の支援、III. 地域への情報発信、**の大きく3つの側面から活動を展開してきた。

まず、**I. 医療者の支援**については、平成 23 年度に (1) がん専門病院である当院職員の認識と介入の現状調査を行い、医療者においてがんになった親をもつ子どもに対する関心は高く、子どもに対する心理的支援の必要性が認識されていることがわかった。また、その後の講演会開催時に行った (2) 一般医療者の認識と介入の現状調査では、来場者の9割以上が子どもへのサポートを必要と認識していた。前述の当院職員の現状調査では、医療者が子どもを支援するにあたり必要とするものとして、「医療者が勉強するための本や資料」、「知識やスキルに関する講義」を希望する割合が大きかったため、平成 25 年度には、(3) 医療関係者を対象としたがん医療における子どもに対する関わり方を学ぶ研修とワークショップを開催し、参加者の理解を深めることができた。

II. 患者（親）および子どもを含めた家族の支援については、平成 24 年度、平成 25 年度に、親をもつ子ども（小学生）に対する認知行動療法に基づく心理教育プログラムである「夏休みキッズ探検隊」を開催し、参加した子どもから高い評価を得、イベント介入前後の子どもストレスについても有意な軽減をみた。(p<0.05)

III. 地域への情報発信としては、市民公開講座を平成 23 年度（来場者 100 名）、平成 24 年度（142 名）、平成 25 年度（221 名）ともに開催し、地域住民ともに、がん患者（親）とその子どもに対する望まれるチャイルドサポートについてのあり方について考えてきた。年々来場者数は増加し、市民公開講座参加後にはもちろんだが、市民公開講座参加前でも子どもに病気について話す必要性について「必要ない」とする回答はみられなくなった。市民公開講座開催は、がんになった親をもつ子どもへのサポートに対する地域住民の認識を把握すること、および地域への情報発信に効果的であったと考えられた。

がん診療連携拠点病院として、今後も患者・家族および医療関係者、地域へのサポートの提供および情報発信を行い、院内、院外、地域が協働して、がんになった「親」をおよびその「子ども」を含む「家族」を支えるしくみ作りをさらに推進したい。

A. 研究目的

I. がん医療およびチャイルドサポートを提供する医療者の支援

現在の日本においては、がんになった親をもつ子どもに対するサポート体制は確立されておらず、問題の存在に気付いた者が職種に関わらず、がん患者の子どもをどのようにサポートするかをそれぞれの現場で模索しているのが現状である。したがって、サポートを必要としているがん患者およびその子どもに対する適切な支援の普及・推進のためには、医療関係者の認識の変容とがん医療の現場において応用できる実践モデルの確立が必須である。

また日本のがん対策において、がん診療連携拠点病院は地域のがん医療の質の向上と均てん化を推進するための重要な役割を担うと位置付けられている。したがって、がん診療連携拠点病院として、一般医療者のおよび地域住民に対しても親をもつ子どもに対する啓蒙活動を行い、今後のサポートの普及および質の向上を図る必要がある。

よって我々は、がん患者の子どもへのサポートの拡充のため、**I. がん医療およびチャイルドサポートを提供する医療者の支援**、**II. 患者（親）および子どもを含めた家族の支援**、**III. 地域への情報発信**、の大きく3つの側面から活動を展開した。

B. 研究方法

I. がん医療およびチャイルドサポートを提供する医療者の支援

(1) がん専門病院である当院職員のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査：平成23年10月医師、看護師、MSW、リハビリスタッフ（PT・OT・ST）、薬剤師、

栄養士を対象に自己記入式質問紙を各部署内にて配布・回収した。本調査において子どもは20歳未満と定義した。

(2) 一般医療関係者のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査：平成22年1月13日四国がんセンターで「がん医療におけるチャイルドケア～親ががん患者である子どものサポート～」と題して小児科医、臨床心理士より講演時、来場者（院内および院外より）に自己記入式質問紙を配布・回収した。

(3) 医療関係者を対象とした研修・ワークショップ「看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～」における参加者のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査：平成25年6月9日四国がんセンターにおいて、がん医療における子どもに対する関わり方についてのCLS、医師、臨床心理士から具体的な方法、技術の研修・ワークショップを実施し、その後に参加者に対して自己記入式質問紙を配布・回収した。

II. 患者（親）および子どもを含めた家族の支援

がんになった親をもつ子ども（小学生）に対する認知行動療法に基づく心理教育プログラム「夏休みキッズ探検隊」の開催とアンケート調査：(1) 平成24年8月7日および(2) 平成25年8月1日に四国がんセンターにおいて、がんになった親をもつ小学生の子ども（参加条件：当院患者の子どもであること（終末期、死別を除く）、子どもが親の病気を知っており参加を了解していること、研究に同意が得られていること）約10名を対象に、認知行動療法に基

づく心理教育プログラムを実施し、その後子どもと親に対して自己記入式質問紙を配布・回収した。

Ⅲ. 地域への情報発信

(1) 平成 24 年 1 月 14 日「子どものいのち親のいのち～がん患者・家族を支える～」と題して市民公開講座を開催し、小児科医、臨床心理士、認定遺伝カウンセラー、がん看護専門看護師、乳腺外科医師より講演後、シンポジウムを行った。(2) 平成 25 年 1 月 12 日「がん患者の子育て支援～家族みんなの笑顔のために～」と題して市民公開講座を開催し、乳腺外科医、臨床心理士、がん経験者、教育関係者、保健・福祉関係者等より講演後、シンポジウムを行った。(3) 平成 26 年 1 月 11 日「つながるいのち～がん医療の現場から～」と題して市民公開講座を開催し、映画『うまれる』の上映、小児科医の講演、がん経験者の対談、臨床心理士の講演を行った。(1)～(3)において来場者に自己記入式質問紙を配布・回収した。

〈倫理面への配慮〉

Ⅰ. およびⅢ. については、本調査への参加は個人の自由意思に基づくものとし、自己記入式質問紙調査は匿名で行い、記入済み回答用紙の管理には注意を払い、統計処理の後は直ちに廃棄した。

Ⅱ. については、今後も子どもおよび患者(親)のフォローアップが必要であるため、自己記入式質問紙調査は記名式とした。記入済み回答用紙は個人情報に留意して厳重に保管している。なお、イベント評価の必要性もあり、参加者募集の段階で、あらか

じめアンケート調査を行う旨をお知らせし、ご了承いただいた方が応募・参加された。

C. 研究結果

Ⅰ. がん医療およびチャイルドサポートを提供する医療者の支援

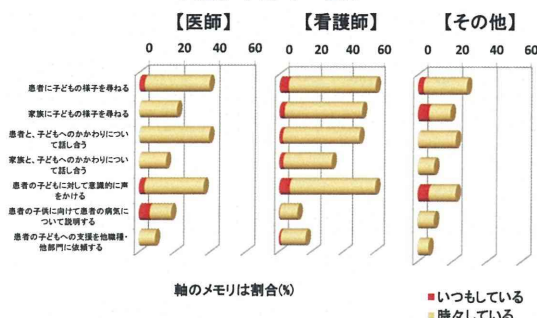
(1) がん専門病院である当院職員のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査
回収率は全体で 361/496 (72.8%) で、職種別みると医師：33/86(38.4%)、看護師：293/369 (79.4%)、その他：32/41(78.0%)であった。

子どもの心理的支援に関する認識として、患者の子どもに関心が「ある」「とてもある」のは 319 (88.4%)、現在勤務している部署で過去 1 ヶ月に心理的支援が必要と思われる患者が 1 人以上いたとしたのは 168 (47.0%) であった。患者の子どもに対する心理的支援を「必要」「とても必要」としたのは 341 (94.4%) で、各時期別に「必要」「とても必要」としたのは、診断期：288 (79.8%) 慢性期：260 (72.0%)、再発・転移期：333 (92.2%)、終末期：345 (95.6%)、死別期：332 (92.0%) であった。子どもの年齢別に「必要」「とても必要」としたのは、0～3 歳：195 (54.0%)、4～未就学児：292 (80.9%)、小学校 1～3 年生：335 (92.8%)、小学校 4～6 年生：345 (95.6%)、中学生：346 (95.8%)、中卒以上：340 (84.2%) であった。

子どもに対する支援の実際(図 1)として、「時々している」「いつもしている」のは、患者に子どもの様子を尋ねる：219(60.7%)、家族に子どもの様子を尋ねる：166(46.0%)、患者と子どもへのかかわりについて話し合

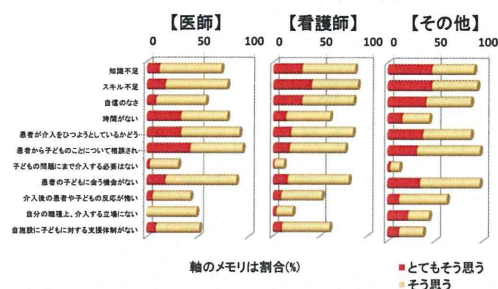
う：168 (46.5%)、家族と子どもへのかかわりについて話し合う：105 (29.1%)、患者の子どもに対して意識的に声をかける：214 (59.3%)、患者の子どもに向けて患者の病期について説明する：43 (11.9%)、患者の子どもへの支援を他部門・他職種に依頼する：53 (14.7%)であった。

(図1) 子どもに対する支援の実際
～四国がんセンター職員～



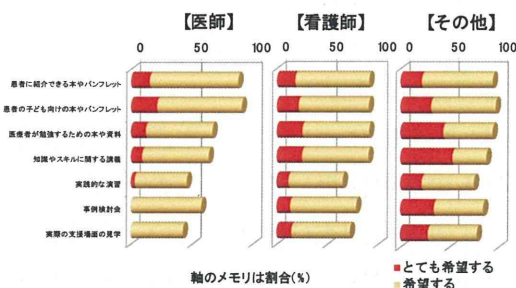
子どもの心理的支援するにあたりためらいや困難を感じることを理由(図2)として、「そう思う」「とてもそう思う」のは、知識不足：308 (85.3%)、スキル不足：320 (88.6%)、自信のなさ：298 (82.5%)、時間がない：218 (60.4%)、患者が介入を必要としているかどうかかわからない：307 (85.0%)、患者から子どものことについて相談される機会がない：287 (79.5%)、子どもの問題にまで介入する必要はない：48 (13.3%)、患者の子どもに会う機会がない：296 (82.0%)、介入後の患者や子どもの反応が怖い：187 (51.8%)、自分の職種上、介入する立場にない：92 (25.5%)、自施設に子どもに対する支援体制がない：206 (57.1%)であった。

(図2) 子どもに対する心理的支援のためらいや困難を感じることを理由
～四国がんセンター職員～



子どもを支援するにあたり希望するもの(図3)として、「希望する」「とても希望する」のは、患者に紹介できる本やパンフレット：326 (90.3%)、子ども向けの本やパンフレット：327 (90.6%)、医療者が勉強するための本や資料：320 (88.6%)、知識やスキルに関する講義：315 (87.3%)、実践的な演習：231 (64.0%)、事例検討会：277 (76.7%)、実際の支援場面の見学：252 (69.8%)であった。

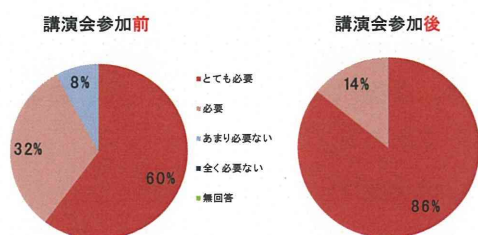
(図3) 子どもを支援するにあたり希望するもの
～四国がんセンター職員～



(2) 一般医療者のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査
回収率は全体で63/92 (68.5%)であった。
講演会参加前後での意識の変化(図4)としては、親ががん患者であることに対する医療者からのサポートについて、講演会

参加前では、とても必要：38（60%）、必要：20（32%）、あまり必要ない：5（8%）、全く必要ない：0（0%）であった。講演会参加後では、とても必要：54（86%）、必要：9（54%）、あまり必要ない・全く必要ない：各々0（0%）となった。

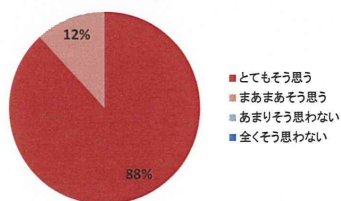
(図4) 親ががん患者である子どもについて、医療者からのサポートは必要と思いますか？
～一般医療従事者～



(3) 医療者を対象とした研修・ワークショップ「看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～」における参加者のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査回収率は34/38（88.2%）であった。

チャイルドサポートの必要性の認識(図5)としては、「ワークショップ前に比べてチャイルドサポートの必要性をより感じるようになったか？」との問いに対して、「とてもそう思う」30名（88.2%）、「まあまあそう思う」4名（11.8%）であった。

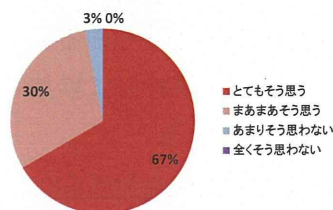
(図5)チャイルドサポートの必要性の認識
「ワークショップ前と比べてチャイルドケアの必要性をより感じるようになりましたか？」



ポートに関する取り組みの参考になったか？」との問いに対して、「とてもそう思う」22名（64.7%）、「まあまあそう思う」10名（29.4%）であった。

(図6)研修・ワークショップの意義

「ご自身あるいは自施設で実施可能なチャイルドケアに関する取り組みへの参考になりましたか？」



II. 患者（親）および子どもを含めた家族の支援

がんになった親をもつ子ども（小学生）に対する認知行動療法に基づく心理教育プログラム「夏休みキッズ探検隊」の開催とアンケート調査

(1) 平成24年8月7日開催

【子どもの背景】がんの親をもつ小学生の子ども13名/10家族（患者数）/きょうだい3組、男児6名：女児7名、1年1名：2年2名：3年2名：4年3名：5年1名：6年3名であった。

【親の背景】患者は全員母親、乳癌11名：大腸癌1名：子宮癌1名、初発7名：転移・再発6名であった。

13名/13名回答（回収率100%）

子どものイベント評価

4段階評定（はい：4、まあまあ：3、あんまり：2、いいえ：1）として平均3.7以上だったのは、「またこんなイベントに参加してみたい」（4.0）、「これから

お母さんやお父さんと話がしやすくなると思う」(3.9)、「キッズ探検隊で知り合った友達にまた会いたい」(3.8)、「自分の体を大事にしようと思った」(3.8)、「ほかの友だちの話聞くことができた」(3.8)、「病院に対する不安や怖さが減った」(3.8)、「病院の食事の大切さを知ることができた」(3.8)、「がんの特徴や治療を知ることができた」(3.9)、「キッズ探検隊に参加してよかった」(4.0)、であった。

イベント前後の子どもの負荷の変化

減少した：8名、評価困難（有効回答外）：2名（ $p < 0.05$ ）

項目別変化として低減率 30%を示したのは、「何か悪いことがおきると心配になる」、「できなかったことや失敗したことをよくよ考える」、「何でも完全にしっかりやらないとだめだと考える」、「お母さんの病気は自分のせいだと考える」、「自分もがんになると心配になる」、「生き物や人間が死ぬことを考えて怖くなる」、「いつもどこか緊張している」、「自分には良いところがある」、の項目であった。

親のイベント評価

4段階評定（とてもそう思う：4、まあまあそう思う：3、あまりそう思わない：2、全くそう思わない：1）として平均 3.7 以上だったのは、「今後もこのようなイベントに子どもを参加させたい」(3.7)、「子どものいるがんの友人や家族に勧めたい」(3.7)、「子どものいるがん患者の家族の安心に役立った」(3.7)、「このイベントにより子どもが成長したと感じる」(3.7)、「子どものがんに対する不安を和らげることに関与した」(3.7)、「子どもの病院や医療に対するよい印象につながった」(3.9)、

「子どものがんについての知識を深めるのに役立った」(3.8)、「全体的に今回のイベントは良かった」(3.9)、であった。

(2) 平成 25 年 8 月 1 日開催

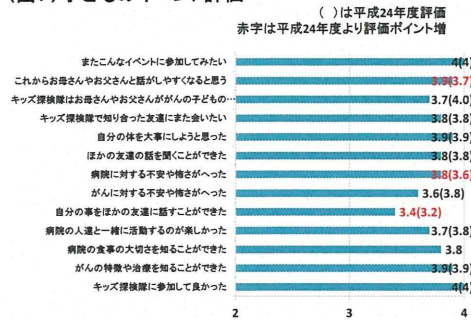
【子どもの背景】がんの親をもつ小学生の子ども 10 名/10 家族（患者数）、男児 6 名：女児 6 名（1 年 2 名、2 年 1 名、5 年 5 名、6 年 2 名）であった。

【親の背景】患者は父親 2 名：母親 8 名（乳癌 7 名、胃癌 1 名、甲状腺癌 1 名、血液癌 1 名）であった。
10 名/10 名回答（回収率 100%）

子どものイベント評価（図 7）

4 段階評定（はい：4、まあまあ：3、あんまり：2、いいえ：1）として平均 3.7 以上だったのは、「またこんなイベントに参加してみたい」(4.0)、「これからお母さんやお父さんと話がしやすくなると思う」(3.9)、「キッズ探検隊で知り合った友達にまた会いたい」(3.8)、「自分の体を大事にしようと思った」(3.8)、「ほかの友だちの話聞くことができた」(3.8)、「病院に対する不安や怖さが減った」(3.8)、「病院の食事の大切さを知ることができた」(3.8)、「がんの特徴や治療を知ることができた」(3.9)、「キッズ探検隊に参加してよかった」(4.0)、であった。

(図7)子どものイベント評価



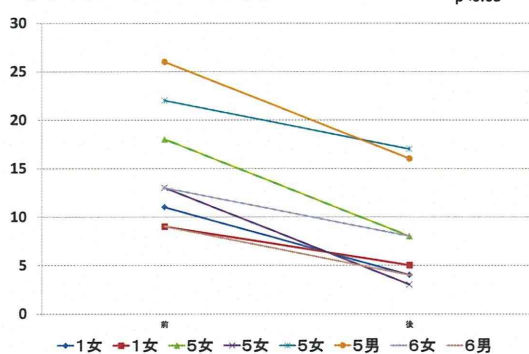
イベント前後の子どもの負荷の変化

(図 8、9)

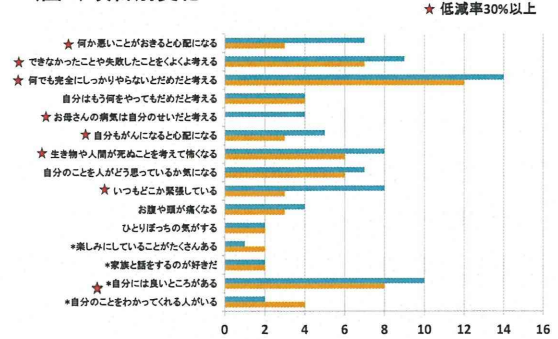
減少した：8名、評価困難（有効回答外）：2名 (p<0.05)

項目別変化として低減率 30%を示したのは、「何か悪いことがおきると心配になる」、「できなかったことや失敗したことをよくよ考える」、「何でも完全にしっかりやらないとだめだと考える」、「お母さんの病気は自分のせいだと考える」、「自分もがんになると心配になる」、「生き物や人間が死ぬことを考えて怖くなる」、「いつもどこか緊張している」、「自分には良いところがある」、の項目であった。

(図8)子どものストレス変化



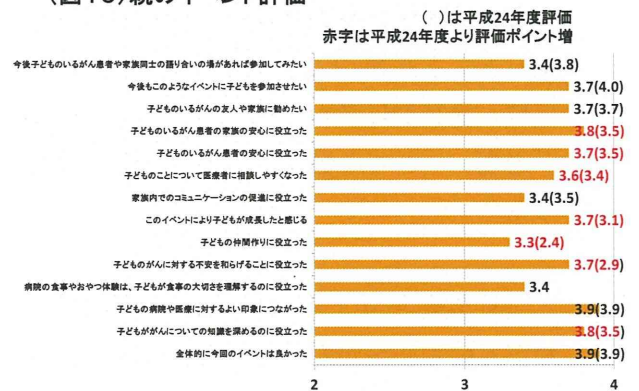
(図9)項目別変化



親のイベント評価 (図 10)

4段階評定（とてもそう思う：4、まあまあそう思う：3、あまりそう思わない：2、全くそう思わない：1）として平均3.7以上だったのは、「今後もこのようなイベントに子どもを参加させたい」(3.7)、「子どものいるがんの友人や家族に勧めたい」(3.7)、「子どものいるがん患者の家族の安心に役立った」(3.7)、「このイベントにより子どもが成長したと感じる」(3.7)、「子どものがんに対する不安を和らげることに役立った」(3.7)、「子どもの病院や医療に対するよい印象につながった」(3.9)、「子どもががんについての知識を深めるのに役立った」(3.8)、「全体的に今回のイベントは良かった」(3.9)、であった。

(図10)親のイベント評価



Ⅲ. 地域への情報発信

(1) 平成24年1月14日市民公開講座「子どものいのち 親のいのち～がん患者・家族を支える～」開催

アンケート回答者 68名/来場者 100名 (68.0%)であった。

子どもに病気について話す必要性については、市民公開講座参加前では「必要」「とても必要」と答えたのは54名(79.5%)、参加後は59名(86.8%)となった。

医療者関係者からのチャイルドサポートについて「必要」「とても必要」としたのは59名(86.7%)であった。

(2) 平成25年1月12日市民公開講座「がん患者の子育て支援～家族みんなの笑顔のために～」開催

アンケート回答者 84名/来場者 142名 (全体の回答率 59.1%、ただし設問によって回答者数が若干異なる)

子どもに病気について話す必要性については、市民公開講座参加前では「必要」「とても必要」と答えたのは、71名(91%)、参加後は79名(100%)となった。

医療関係者からのチャイルドサポートについて「必要」「とても必要」としたのは78名(100%)であった。

教育関係者からのサポートについて「必要」「とても必要」としたのは78名(100%)、保健・福祉関係者からのサポートについて「必要」「とても必要」76名(97%)であった。

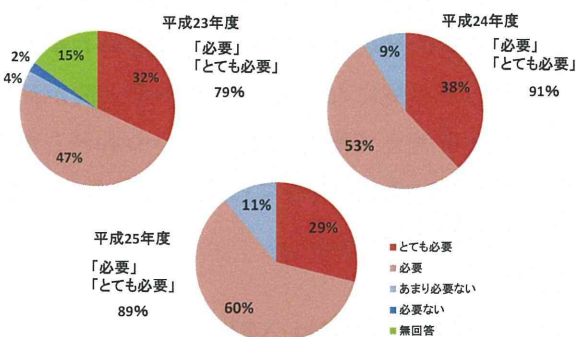
(3) 平成26年1月11日市民公開講座「つながるいのち～がん医療の現場から～」開催

アンケート回答者 121名/来場者 221名 (全体の回答率 54.8%、ただし設問によって回答者数が若干異なる)

子どもに病気について話す必要性については、市民公開講座参加前では「必要」「とても必要」と答えたのは88名(98.9%)、参加後は89名(100%)となった。(図11) 医療者関係者からのチャイルドサポートについて「必要」「とても必要」としたのは97名(97.0%)であった。

教育関係者からのサポートについて「必要」「とても必要」としたのは98名(97.0%)、保健・福祉関係者からのサポートについて「必要」「とても必要」97名(96.0%)であった。

(図11)「子どもに病気について話す必要性」～市民公開講座前の参加者の認識～



D. 考察

I. がん医療およびチャイルドサポートを提供する医療者の支援

がん専門病院である当院職員のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査においては、がんになった親をもつ子どもに対する関心は高く、また、親の病期や子どもの年齢にかかわらず、子どもに対する心理的支援の必要性が認識されていた。また、子どもに対する介入の実際において